

(3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI /12ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。

※必ずA3片面1枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは5MB以下としてください。

NITS・教職大学院等	実施機関名・連携機関名 ※実施機関名、及び連携機関名（ある場合のみ）を記載してください。 京都教育大学大学院連合教職実践研究科
コラボ研修プログラム	事業名：【NITS・京都教育大学教職大学院コラボ研修】 京都教育大学幼児教育協働研修 —保育実践に生きる評価に関する対話的シンポジウム—
支援事業報告書	研修等名：【NITS・京都教育大学教職大学院コラボ研修】 京都教育大学幼児教育協働研修 —保育実践に生きる評価に関する対話的シンポジウム— ※内容をわかりやすく伝えるためのタイトルを記入してください。
	開催日時：令和5年11月8日 14時30分～17時 開催場所：キャンパスプラザ京都（京都市下京区西洞院通塩小路下る東塩小路939） 参加人数（総数）と参加者の属性：（65人）幼稚園49人、保育所3人、こども園1人、教育委員会・幼児教育センター12名

内容：※全体発表の内容をテーブル起こしするなど、具体的に記載してください。研修等の様子は、写真を右に貼り付けてください。

京都府下の幼児教育関係者を対象とした対話的シンポジウムを、以下のような内容で実施した。

日時：2023(令和5)年11月8日(水) 14:30～17:00

場所：キャンパスプラザ京都 第3講義室

テーマ：保育実践に生きる評価

概要：これまで各園や地域で取り組まれてきた保育実践の質評価のよさや課題を踏まえた上で、開発の進む国内の保育実践の質に関する評価スケール試案等も取り上げた対話的シンポジウムを行う。

パネラー：京都市立深草幼稚園園長 奈良美保子氏、鳴門教育大学大学院教育実践教授・附属幼稚園長 勝浦千晶氏、国立教育政策研究所幼児教育研究センター副センター長 掘越紀香氏、目白大学准教授 荒牧美佐子氏

コーディネーター・司会：京都教育大学 古賀松香

(1)パネルディスカッション

4名のパネラーから以下のような話題提供をいただいた。奈良氏からは、京都市立幼稚園における学校評価システムの全体像と実践に関する自己評価の具体例から、実践の質を高める園の自己評価の在り方と課題について、勝浦氏からは、徳島県保育・幼児教育センターにおけるアドバイザー派遣事業や実践のポイントを可視化する資料、附属幼稚園における自己評価を深める保育記録等の例を挙げつつ、実践を問い対話する在り方について、掘越氏からは、国立教育政策研究所幼児教育研究センターのプロジェクト研究から「幼児教育における保育実践の質評価スケール案」策定の背景や内容のポイント、またそれらが日本の保育実践に根差していることを示す事例の紹介を通して、スケール案の今後の活用と課題について、荒牧氏からは、調査事例を挙げつつ数値化とその解釈や、保育の質評価を数値化することについて、さらには実践の質向上に向けた評価の妥当性・信頼性を高める重要性について、それぞれ話題提供がなされた。ディスカッションについては、全体協議で行うとして進行した。

(2)グループディスカッション

パネラーの話題提供をもとに、4人グループでディスカッションを行った。保育実践に生きる評価のために、①自らが取り組んできた評価について今後も大切にしたいこと・新たに取り組みたいこと ②本質的な内容を問う評価にとって重要なこと ③あらためて湧いてきた疑問・質問の3つを軸に話し合った。

(3)全体協議・まとめ

幼児教育の質保証と質向上に関心が集まり、評価の在り方の検討が進みつつある現在の動向を踏まえ、園—自治体—国という各レベルにおける評価の在り方をつなげてみると、多様で幅広の評価方法があること、しかし、それらは常に実践に立ち返るためのものであることが確認された。その上で、評価の妥当性・信頼性を高める在り方をそれぞれの立場でどう考えるか、パネルディスカッションを行った。さらにフロアからの質問や感想を受けて、全体での協議を行った。最後に、まとめとして各パネラーがコメントし、言語化と実践のあいだにある意味を問うことの繰り返しを誠実にやり、地域や社会に理解を広げていくこと、保育実践をもとにした対話を深めていくこと、保育現場の実践者が納得感をもつ評価内容とシステムの改善を行っていくこと、個ではなく組織で評価を受けとめ揉んでいく風土にしていくこと等のポイントが提示された。

成果： ※参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

事後アンケートにより、参加者の声を収集した（回収率 90.7%）。

研修によって新たな気づきを得ることができたか → 大変よい・よい 100%

今後の保育や研修に生かすことができる内容か → 大変よい・よい 100%

という非常に参加者満足度の高い研修となった。自由記述では、「評価については難しいというマイナスイメージが大きかったが、保育の質を高める・保育を振り返る視点で見方が変わった」「数値化についての話から、これまで自分の視点で行っていた評価を多様な視点から振り返ることで新たな気づきや学びにつながるということがわかった」「自分たちの保育や園内研修が評価につながっていること、語り合うことの大切さを知った。とことん語り合っていきたい」「なぜそうするのか？自身の保育の中で問い、振り返ることを大切にしていきたいと思った。そして、それを保護者の方や外部の方にしっかりと言語化して伝えられる力をつけていきたい」「評価というと、いつも管理職の先生任せになってしまうという思い込みもあったが、日々評価の繰り返し、保育の改善に役立てるものだと思うと、もう一度必要性について考え直せた。優劣をつけるものではなく、日々の保育の課題の発見、改善であるということが学べて良かった」「評価を数値化することについては具体的なイメージをもていなかったが、その数値をどう見取るかという点で、自分たちが普段しているふり返りや、保育の意図などがつながっているということに、とても納得できた」等、評価に関する見方の変容や考えの深まりのうかがえるコメントが多数寄せられた。

アイデアや工夫したこと： ※3～5つ程度の箇条書きしてください。

- ・地域の園、京都以外の自治体、教職大学院と連携する大学附属幼稚園、国、研究という各レベルにおける評価実践とシステムについて、先端の話題提供をしていただくこと
- ・徳島県教育委員会提供の『全ての幼児に提供される質の高い幼児教育のための Q&A 集』冊子、国立教育政策研究所幼児教育研究センター策定『幼児教育における保育実践の質評価スケール案』といった分厚い資料も含めて配布し、各参加者が手元で見ながら学べるようにしたこと
- ・日本の保育文化や実践を大切にしたい評価の在り方について、新たな知識を得ながらも、講義形式ではなく、参加者同士のディスカッションやパネラーとの全体協議等、参加者が対話を通して評価に対する見方や考え方を練り、醸成できるようにしたこと

<写真・図など> ※会場の熱気や規模がわかる写真、参加者の表情がわかる写真（寄って撮影またはトリミング）を撮影してください



企画趣旨説明



パネラーによる話題提供



園長、教頭、中堅、若手、アドバイザー、それぞれが立場を超えて熱く語り合う